

## 中国の識字問題（その一）

大原 信一

一九九〇年は国連の定めた「国際識字年」にあたり、世界各地でこれに因んだ行事や集会がひらかれた。これは一九八七年の第四二回国連総会において、ユネスコの提唱によりきめられたもので、二一世紀までの一〇年間で地球のだれもが字が読めるようにしようという目標が掲げられている。南北問題解決のためにも、識字人口を増やすことが必要というのが、その主旨である。一九九〇年の国際識字年は、その一〇年計画の出発の年である。この問題が国連で取り上げられたのは、これまで各地で難民救済に当たった経験などから、いくら食糧援助をしても、教育が欠落しているかぎり、問題の解決は永遠に

ないとわかったからである。ユネスコでは、一九八〇年にはラテンアメリカ諸国、八四年はアフリカと、それぞれ識字プログラムを打ち出した。これについて、八五年のユネスコ総会ではアジア太平洋地域の識字運動を推進するアピールを決議した。世界の非識字者のうち三分の二がこの地域に集中しているからである。

ユネスコの調べでは、世界の一五歳以上の成人人口のうち非識字者の数は八五年現在で八億八、九〇〇万人、アジア太平洋地域にその三分の二が集中している。人口の多いインドは二億六、四〇〇万人、中国は二億二、九〇〇万人を数える。ユネスコが集計中の最新統計による

と、九〇年の非識字者は世界で九億六、二五〇万にのぼる。従来の数字より七、三五〇万も多い。これは、世界最大の人口をもつ中国の集計が修正された結果だという。世界の識字問題は、この二つの国の識字事業の成果により左右されかねない状況にある。

漢字の国・中国はこれまで数十年来この独自かつ複雑な問題と取り組んできている。国際識字年に因んで、その努力のあとを、晏陽初の事跡を中心に振り返ってみたい。

「その一」すなわち本編においては、現在の中国の識字状況と平民識字運動について述べ、「その二」において、定県実験区の識字運動、旧解放区ならびに全国解放後の識字運動について触れる予定である。

## I 現在の中国の識字状況

一九四九年に新たに人民政府が成立して以来、文盲<sup>①</sup>をなくすことは新しい政府の重要な政策の一つとなった。

解放前、すなわち新政府成立以前の正確な文盲率の推定は困難である。第一に、信頼できる統計が存在せず、第二に、中国において文字が使えるとは何を意味するかが問題だからである。ド・フランス<sup>②</sup>に従えば、革命時の中国では全人口の一〇ないし一五パーセントしか読み書きができず、また中国の全歴史をつうじて読み書き能力のあった者が総人口中にしめる割合は一パーセントに過ぎなかったと言う。中国政府の公式発表によれば、解放以前の文盲率は八〇パーセントと言うことである。

ごく最近まで中国の文盲率がこれほど高かった原因について、漢字使用にその責任があるとする意見が内外に少なくなかった。中国政府は、階級社会において人民に教育の機会が与えられていなかったことこそ高い文盲率の原因だとする。たしかに、漢字特有の複雑さのために、文字にかんする知識がひろく行きわたらなかったと言う考えは、一理あるかにみえるが十分な検証が成されたわけではない。インドのように、幾世紀にもわたって

表音文字の体系をもちながら、中国と変わらぬ高い文盲率をしめす場合があるし、また日本のように複雑な文字体系をもちながら、文字知識が普及している例もある。識字問題を考察するに際していろいろな条件を複合的に考えあわす必要がある。

最近の統計、すなわち一九八二年の人口センサスの結果によれば、中国大陆の総人口は一〇億三、一八八万、そのうち文盲・半文盲の数は二億三、五八二万で、総人口のおよそ二五パーセントである。解放後、文盲率は三分の一にまで減少したわけである。人民政府の達成した業績は一九四九年と一九八二年の状況のグラフ<sup>(3)</sup>を比べれば一目瞭然である。

一九五三年に、国务院の前身たる政務院の「文盲一掃工作委员会」が定めた基準は次のとおりである。①幹部や労働者のばあい、常用字二、〇〇〇字がわかり、ふつうの新聞や雑誌が読め、二三百字の短い応用文が書ける。

②農民のばあい、常用字一、〇〇〇字がわかり、ふつう

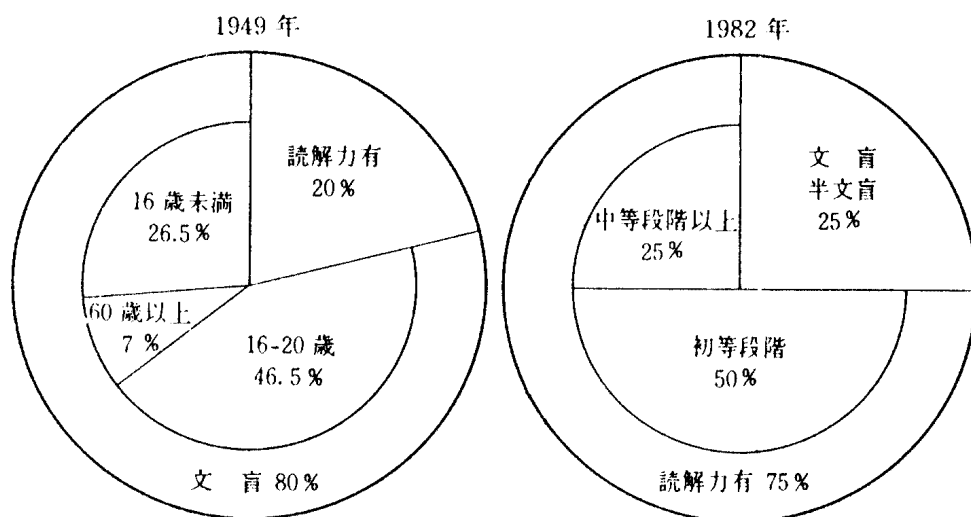


図1 中国における読解能力の普及度 (1949年および1982年)  
(ユネスコ、1933年による)

の新聞や雑誌がだいたい読め、農村で常用される書き付けや領収書が書ける。③都市の勤労者のばあい、常用字一、五〇〇字がわかり、読み書きの面では上記の基準をみたしていること、これらの基準に達しない者は半文盲とする。

日本では、一九四八年に行われた読み書き能力調査の報告書『日本人の読み書き能力』のなかで、仮名はどうにか読み書きできるが漢字が加わったものは読み書きできない者を不完全文盲とよび、仮名の読み書きもできない総得点ゼロの者を完全文盲とよび、両者あわせて文盲率を二・一パーセントとしている。アメリカの場合、読み書き能力の仕上げを小学校三学年におき、一〇歳以上で小学校三学年の平均点以下の読み書き能力しかない者が文盲となる<sup>(4)</sup>。したがってそれぞれ基準がちがうので、この問題について共通の基盤はない。

中国は国土が広大であるから、地域格差がきわめて大

きい。文盲率は経済力の地域格差と相関関係をもっている。図二は省別に文盲率をくらべたもの、図三は省別に経済力をくらべたものである<sup>(5)</sup>。このように文盲率が高い地域には次のような特徴がみられるという<sup>(6)</sup>。

- 一、遊牧民、山奥の農民、移動作業をする漁民などが多くすんでいる。
- 二、漢字を使用しない少数民族がすんでいる。
- 三、自給自足の零細農民が多い。
- 四、通学に不便あるいは学校がない。
- 五、子供が幼いころから農作業をてつだう。
- 六、生活にゆとりがない。
- 七、家族単位での出稼ぎが多い。
- 八、テレビ・ラジオなどの普及が低く、情報が乏しい。
- 九、親の世代も文字を知らない。
- 十、女性差別意識が強い。

# 95 中国の識字問題(その一)

図 2

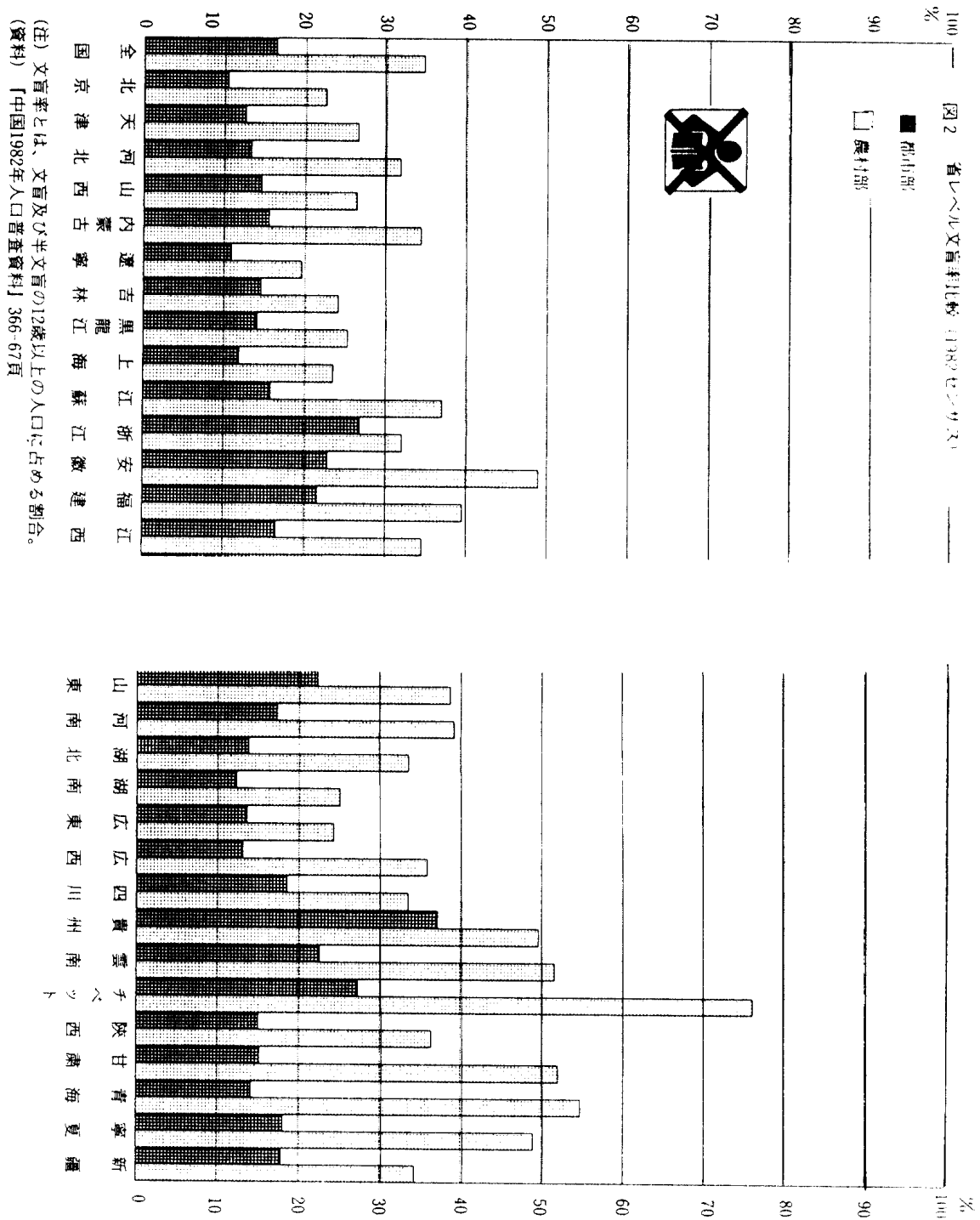
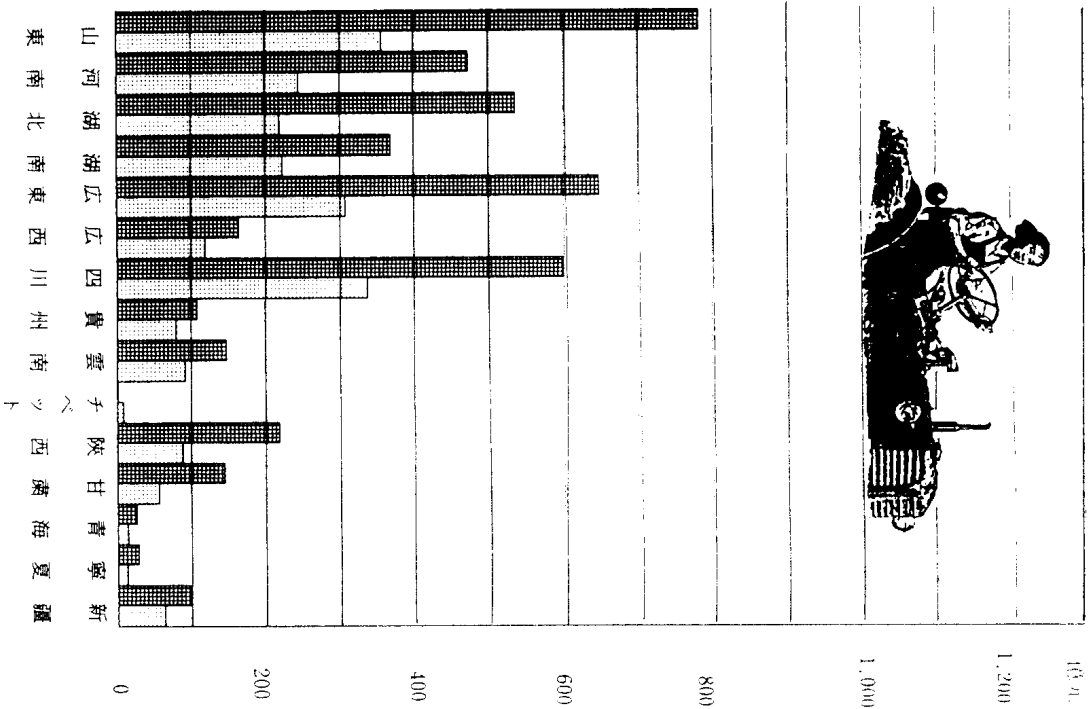
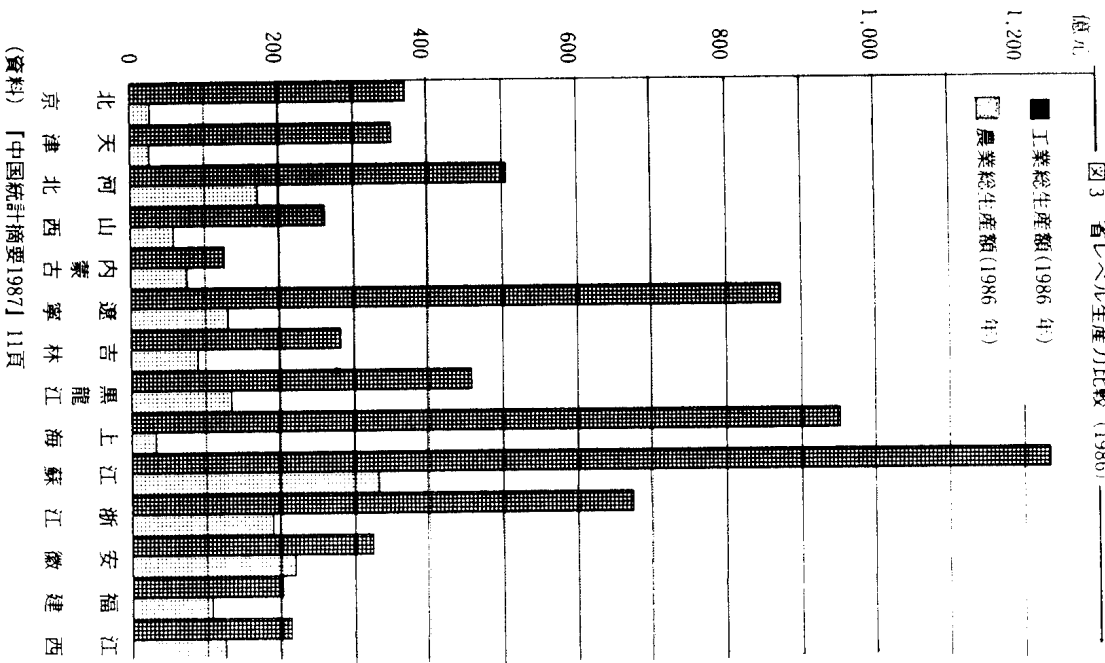


図3 省レベル生産力比較 (1986)



解放前、農村部で八〇パーセント、都市部で六〇パーセントであった文盲率は、一九八七年の統計では、農村部で六〇パーセントに減少しているのにたいし、都市部では五パーセントにまで減少し、両者の格差の拡大は内なる「南北問題」の様相を呈している。

男尊女卑の封建思想がいまなお払拭できていないことや女性に家事の過重負担がかかる生活様式などのため文盲の七〇パーセントを女性がしめている。女の子にたいする教育投資のためらいなどから、就学年齢の未就学者ゼンたいの八三パーセントが女子である。これまで、減少する一方だと思われていた文盲が最近ふたたび増加の傾向にあり、若い世代の中で再生産すらされていると言<sup>う</sup>。

しかし、中国政府も手をこまねいているわけではない。一九八八年二月、國務院は「文盲一掃活動条例」を公布し、識字活動は国民の権利であり、義務であると規定した。ユネスコが国際識字年の情報誌として新たに創刊し

た《The Challenge 1990》によれば、中国政府はこの年をむかえるにあたり、一二歳から四〇歳までの八、〇〇〇万人を対象に識字キャンペーンを展開する計画にとりくんでいる。

## II 晏陽初と平民識字運動

識字運動については晏陽初らの業績から始めなければならぬ。それは彼らによって一つの典型が生み出されたからである。ただ、彼らの活動は民間団体の手によるボランティア的性格をもち、のちに展開される社会主義体制のものとは性質がことなっている。

一九一六年、第一次世界大戦のさなか、連合国は塹壕をほり、弾薬などをつくる労働者を必要として、中国の河北・山東の両省から約二〇万の中国人労働者を募集した。そのうち約一〇万人がイギリス軍のもとで、約五万人がフランス軍とアメリカ軍のもとではたらいっていた。彼らはほとんどが目に一丁字ない文盲の人たちであった。

そのうえ、果物の皮を食べちらかしたり、所かまわず唾や痰をはくなど、故郷の習慣をそのまま持ちこんだ立ち居ふるまいは周囲の顰蹙をかった。連合国の将校はだれも彼らの言語を解さなかった。紛争がたびたび生じた。しかし労働者たちはよくはたらき、立派な業績をあげ、連合国の好評を博した。これらの人々になにか適当な娯楽をあたえるため、彼らのYMCAを組織することが提案された。

連合国のYMCAは中国大学生を募集して、彼らの同胞を教化する仕事を受け持たせた。その大学生の一人が晏陽初である。彼は当時アメリカにいたが、募集に応じてフランスにわたった。彼は一八九三年に四川省巴中県に生まれ、少年時代をミッション系の学校で過ごし、二〇歳のとき聖保羅書院（香港大学の前身）に入学し、そこから一九一六年にイエール大学に留学した。一九一八年、イエール大学を卒業した彼は北米キリスト教青年会（YMCA）から派遣されてフランスに赴いた。ブロー

ニュで五、〇〇〇名の中国人労働者にたいする教育に従事するためであった。そこで彼ははじめて自国の「平民」すなはち大衆に接したのであった。彼の任務は、文字を教えることに加えて教育を通し彼ら労働者の情緒を安定させることであった。

彼は毎晩講話をおこない、漢文班を設けて熱心に教育活動にとりくんだ。労働者たちは一〇時間の労働をおえたあとでも熱心に耳をかたむけ、余暇には勤勉に勉強した。半年ののち、年齢三〇歳から五〇歳にわたるこれらの労働者は、学習意欲があるだけでなく、その能力があることがわかった。彼らはまもなく故郷の家族に簡単な手紙が書けるようになった。この教育実践を通じて特権的留学生たちの大衆にたいする認識は大きく改められていった。一九一九年一月には、晏の編集する『駐法華工週報』がパリで発刊された。一九二〇年、彼は帰国したが、時あたかも中国では平民教育運動の波が高まりつゝあった。それは五四時代の混沌たる時代状況のなかで生まれたも



ので、成人に読み書きを教える識字教育と、ジョン・デューイの来華などを通じて形成されたデモクラシー教育という二つの要素が平民教育という概念のなかに含まれていた。

五四運動の衝撃によって、これまで読書にひたり、政治に無関心であった学生たちは、教室をはなれ街頭にくりだし、反帝国主義・反封建主義の宣伝活動に身を投じた。彼らの実践活動は街頭宣伝・ストライキ・ボイコットなどとどまらず、文盲の大衆にたいする「義務教育」すなわち無料奉仕教育の実施という形をもとった。一九一九年一月から二〇年十二月までの二年間に、上海の新聞にあらわれる各種の義務学校・平民学校・夜学校・貧民学校・露天学校・通俗学校などをすべて合わせると、上海およびその周辺だけでも、八〇をこえる義務学校を筆頭に、その数はほぼ一四〇校に達している。その設立者の名称からみると、商業界連合会などとならんで上海学生連合会など学生の手によるものが多い。

ここで、その当時までの社会教育（民衆教育）を一瞥しておこう。

一九一二年（民国元年）、新しく発足した中華民国臨時政府の教育部に社会教育司が設けられ、同時に地方行政機関にたいし、地方ごとに図書館および民衆教育館を設置すべき旨の訓令が発せられた。この時から政府サイドの社会教育は軌道に乗ったわけである。

政府の施策は図書館・博物館・民衆教育館その他の施設による民衆の知識水準の向上に重点が置かれ、それは具体的に識字教育の推進ということに帰着するはずであるが、推移をみると教育部の計画どうりに進展したわけではない。

清末に、簡易識字学塾が全国数箇所設けられ、未就学児童や成人の文盲にたいする識字教育を実施したことがある。間もなく、清朝が滅びるとともに消滅した。新しい文教当局はこれを引き継ごうとしなかったので、地方行政機関や民間人によって「通俗教育」が始まった。

この民国元年には、南京の通俗教育研究会（五月）、北京通俗教育研究会（十一月）、江西通俗教育研究会（十二月）、などが成立した。翌一三年には上海・滬江大学の董景安が通俗学校を開設した。彼は『六百字課』をあらわし一九一三年から一九一八年までの間に四〇〇箇所で使用され、その教育を受けた者は四、〇〇〇人をこえたと伝えられている。

更に、一五年には「通俗図書館規定」、「通俗教育講演所規定」・「通俗講演規則」などが制定された。民間初年からの数年間に、通俗学校・通俗図書館・通俗教育講演所・露天学校などがあちこちに設けられ、五四前夜の頃までに表面的には、かなりめざましい進展ぶりを示している。

晏は帰国してから、フランスでの自分の体験にもとづいて新しい実験を行うことを決心した。彼は上海のYMCAの中に平民教育部を創設してその主宰者になり、全国一九省の平民学校の現況を調査した。その結果、気が

ついたことはフランスにおける中国人労働者と中国におけるそれとの相違であった。第一に、前者は一日の労働時がきまっているが、後者は一日中忙しい。第二に、前者は生活程度がより高く、学習の刺激と意欲とがより強く、家庭にたいする責任がより少ないが、後者は刺激が少ないことと重い家庭的責任のために学習意欲をほとんどもっていない。第三に、フランスではすべてが労働者でありその数も限られていたが、中国では彼らの職業はさまざまであり、数があまりにも多い。

このほか、彼はボランティアの学生たちの教育方法がバラバラで、よいテキストがない、大学での学業の余暇に教えるに来るころには疲労しているなどのため、あまり成果をあげていないことをも発見した。理想にもえて試みた学生たちの教育実践は、経済的困窮も加わって、安定した永続的なものにはなりえなかったわけである。

上記のような調査結果と反省にもとづいてまずテキストの準備が始まった。それには当時、東南大学の教授で

あった陳鶴琴が主となって普通人の語彙をつくり、使用漢字の頻度を調査した。こうして文盲が簡単な手紙を書き帳簿をつけ新聞が読めるための一、〇〇〇字が選定された。次いで、この一、〇〇〇字を用いて四冊のテキストが作られた。これが『平民千字課』<sup>(8)</sup>として知られているものである。各冊は二四課からなり、一カ月のうち日曜をのぞく二四日に配分されている。各課は一時間半で学習できる。全課は九六時間、四ヵ月で終了しうるようになっていいる。学生および教師の募集方法、学校の組織方法、運営方法、督励方法なども討議された。

周有光：『漢字改革概論』（一九七九年第三版）によると、『平民千字課』が生まれるまでの経過は次のとおりである。

一九二二年、陳鶴琴は白話文中の漢字出現頻度の統計的方法による研究を始め一九二八年『語体文応用字彙』（商務印書館）を刊行し、四、二六一字を選定した。こ

の統計の目的は、『千字課』の編集にさいし選字の参考とするためであった。

また、『千字課』の前に、董景安編の『六百字課』（文言）、傅葆琛編の『通俗六百字韻言』（韻文）があり、一九二一年に平民教育促進会は『平民千字課』の編をおえ、翌二二年に上海青年会より出版した。一九二三年に陶行知らが重編し、商務印書館から出版した。

なお、参考までに紹介すると、一九八八年三月に発布された『現代漢字常用字表』の説明中には、上記の陳鶴琴『語体文応用字彙』（四、二六一字）が参考資料の筆頭にあげられている。

二〇年から二二年春にかけての全国的調査を終えたのち、晏陽初らは上海でなく、位置・規模・産業などの面から中国の数多くの都市を代表するものとして湖南省の長沙をえらび、一九二二年の春から最初の実験をその地のYMCAの指導のもとに行った。

第一回めには、一、二〇〇人が四ヵ月の課程を終え、

うち九六七人が卒業試験に合格した。第二回めには、一、四〇〇人の新入生のうち一、〇〇〇人が合格した。この実験は教育家や社会事業家の注目をひき、長沙の運動に引き続いて芝罘・嘉興・杭州・漢口・南京などの都市で同様の試みが行われた。

全国的に軍閥が割拠して軍備増強をきそい、教育費が極端に削減されるなど、劣悪な教育環境に苦悩する教育界から、あまり経費のかからぬ平民教育運動は歓迎され、全国にひろまった。そして、湖南全省平民教育促進会ができたのを皮切りに、一七省に省立の平民教育促進会が設けられ、そのほか数多くの都市で私立のものが創設されている。この識字教育をうけた者は初期段階で三〇〃五〇万といわれている。最終的には『平民千字課』の出版部数の累計が三六〇万部をかぞえることから、実際に教育をうけた者の数は三〇〇万をこえると推定される。このように平民教育運動が急速な盛り上がりを見せていた一九二三年五月、この運動の中心人物である朱其慧・

晏陽初・陶行知らの呼びかけで「中華平民教育促進会」が結成された。これをうけて二三年八月二六日、第一回全国平民教育大会がひらかれた。これには二〇省区の教育庁と教育会の代表など六〇〇余名が北京の清華学校講堂にあつまった。そして「平民教育促進会総会」を北京に設けることを決議した。総会には各省代表二人ずつをもって構成される合計四〇名の理事会をおき、理事会によって在京執行理事九名をえらび、朱其慧を理事長とし、晏陽初を総幹事とした。

平民教育運は長沙・煙台・嘉興・杭州などにはじまり、長江流域の武漢・南京にひろまり、さらに全国に波及していった。二二―二五年がその黄金時代である。急速な発展の内部にかかえる種々の矛盾や欠点のため、やがて停滞を余儀なくされた。いささか竜頭蛇尾の感がある。陳青之『中国教育史』（一九三六）は、「革命軍が軍閥を倒して以後この運動はついに停頓に帰した」としか触れ

ていないが、おそらく混乱した政治情勢の影響・軍閥混戦による教育破壊などが一因と思われ、従来つぎのように言われていた。

この運動の活動分子であった若い知識階級が革命戦線の分裂に幻滅を感じて、こうした教育運動に熱意を失い隊伍を去ったためではあるまいか。

(小野忍「国語問題と国語運動」<sup>⑨</sup>)

晏陽初が河北省定県に農村教育実験区を始めたのは一九二九年である。平民教育の都市から農村への転入という点でみれば、運動の主体が都市の労働運動の激化に絶えられなかった一面を指摘しなければならぬだろう。(斉藤秋男「反動支配下の中国知識人と前衛」<sup>⑩</sup>)

小林善文『平民運動小史』<sup>⑪</sup>は停滞の原因をすべて政治的背景に還元できないという観点から、「平民教育運動自体のもつ問題点」を次の要約のように六点あげている。

①運動の手足となって活躍した小学校教員の経済的条件

が劣悪で、その改善なしには息の長い教育実践は持続できないこと。②本当に字を知らない者は来たがらないこと。③中途退学者が多く、労働条件の改善が必要なこと。④授業中の管理が不十分で、テキストも大衆の日常生活に即していないこと。⑤資金が乏しいこと。⑥二五年の五・三〇運動以後、国家主義を標榜する教育者たちの平民教育にたいする批判がはげしくなったこと。

晏陽初はフランスにおける識字教育の体験を生かして、北京に本部をおく平民教育促進会の指導者として民衆教育のため努力していたが、一九二九年以後、北京を去って河北省定県に移った。最初の二年間は都市に重点をおく運動であったが、広大な農村を無視して教育の普及はありえない。このことを自覚した彼は、すでに二四年ごろから工作人員を定県に送り、人口の八三パーセントが文盲というこの県で平民教育を提唱し、平民学校を続々とひらいていた。定県は京漢鉄道の沿線、保定と石家荘

の中間に位置し、全県が平原地帯にある。人口四〇万、当時中国の人口は四億とされていたので、その一、〇〇〇分の一に当たる。促進会はこの地区を「華北実験区」とし、科学的な農業改善事業と並行して、平民識字教育の推進にあたることになった。二九年には、促進会の本部も北京から定県に移り、その鄉村建設の実験をいっそう強化することになった。

## 注

- (1) 文盲(もんもう)。非識字者ともいう。昔から「母語の一般的読み書きに使われる文字についての能力が全くないこと。あるいは、いくらかの文字については能力があるとしても正常な読み書きのできないこと。また、そういう人。厳密には、日常生活を送るのに必要な最低の読み書き能力(literacy)にも達しないこと」(illiteracy)をいい、また、そういう人をいう。」ばあいの用語として使われてきた。中国語の「文盲」wenmang もほぼ同じなので、以下慣習にしたがう。(国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版 昭和五七年再版)

(2) JOHN DE FRANCIS. 1950. Nationalism and

Language Reform in China. RINCEON UNIVERSITY.

- (3) フロリアン・クルマス著 山下公子訳『言語と国家——言語計画と言語対策』岩波書店 一九八七年
- (4) 『国語学大辞典』文盲(もんもう)の頃 参照。
- (5) 矢吹晋著『図説 中国の経済水準』蒼々社 一九八七年
- (6) 白家瑤 中国——再生産される非識字者(『月刊しにか』一九九〇年八月号 特集・アジアの識字教育)
- (7) 同上
- (8) この頃、『平民千字課』のほかに、これに準じたテキストが何種類も出版されているので、これらを列挙する。書名、冊数、編者、発行者、出版年月日、出版回数、定価、(備考)の順。
- ① 平民千字課 四 晏陽初・傅若愚・黄滄漁 中華基督教青年会 一九三二年二月 二四年七月三版 毎冊七分 百冊八折
- ② 平民千字課 四 朱経農・陶行知 商務印書館 一九三三年九月 二四年三月四一版 毎冊三分
- ③ 千字課本 四 魏水心・董文・載渭清・曹芝清 世界書局 一九二五年四月 毎冊三分(教学法全を付す)
- ④ 青年平民読本 四 卓愷沢 上海書局 一九二五年七月 毎冊三分

⑤平民課本 黎錦暉・劉傳厚・陸費逵・載克敦 中華書局 一九二四年三月 二四年一月三版 每冊三分  
(教学法全を付す)

⑥平民讀本 四 李六如 長沙広文書局 一九二三年一月 二四年三月四版 每冊八分四釐

⑦成人讀本 四 曹典暉 長沙文化書局 一九二二年一月 二五年五月四版 每冊四分

⑧新千字課 四 曹典暉 長沙貢院西街野村印刷局 一九二四年六月 二四年一〇月再版 每冊三分五釐

⑨平民識字讀本 張思明・載聯蔭・高元沢 奉天教科書編審処 未詳 未詳 未詳

上記の表は湯茂如 城市平民學校的教材(『教育雜誌』一九一〇)ならびに小林善文著『平民教育運動小史』(京都大学人文科学研究所 共同研究報告『五四運動の研究』第三函一〇)による。

(9) 小野忍・齊藤秋男 共著『中国の近代教育』河出書房 一九四八年。

(10) 『思想』一九五四年一二月号。  
(11) 小林善文 前掲書。